牧場の中なので、こんなシーンもあり。　左隅が私の乗っている馬の耳　シープドックの睨みだけで羊は逃げ出す

を空中にバタバタ始めたが一向に起き上がらない。おじさんが体を押してやるとやっと立ち上がりあわてて逃げていく。おじさんが言うには「この牧場の羊は太ってしまって、牧草地に空いている穴などに足を取られてひっくり返ると、自力で立ち上がれなくなってしまっているのだ。」半分冗談だと思って聞いていたが、その後何頭かひっくり返って我々が近づくので必死に立ち上がろうとしてもなかなか立ち上がれない羊を見て、どうやら話しは本当の様だ。お供してきたシープドックにおじさんが何か言うと、羊の群れの方に走って行って、羊の群れが一斉に動き出した。さすがにシープドックだ、なかなかいい仕事している。少し急な下り坂。私の乗っている馬が何となく歩き方が遅くなったと思ったら、どうやら歩きながらお土産を落していたようだ。

馬が鼻づらを押し付けてくる　かわいい！

出発地点に戻ってきた。馬を下り、他の馬も繋がれている厩舎の横に行くと、一番端の馬が私の方に首を伸ばしてきた。首をなぜてやると、顔を寄せてきて私のシャツを少しなめてる。おいおいシャツは飼葉じゃないのだから食べないでくれ。鼻づらを押し付けてきてかわいい。鼻筋と首、顎などなでてやると、気持ちよさそうにおとなしくしている。もっとゆっくりと遊びたかったが、ガイドのおじさんは向こうに戻ってティータイムだと呼んでいる。歩きながら、「お茶を飲んだ後、いろいろな動物にエサをやって触れることができるから、出発の時間まで楽しんでください」と、他の観光客のいるゲストハウスへ、ガイドのおじさんが、「ここで好きな飲み物

を自由に飲んで、クッキーもあるから全部食べてもいいよ。」と皿ごとテーブルに持ってきてくれた。ほかの観光客は外に出ていった。動物への餌やりイベントが始まるらしい。我々のガイドのおじさんは、ゆっくりお茶をのんだら、今観光客が行く先を左に行けば動物がいるからあとでいけばいいと説明してくれた。晴天の中、馬の背に乗っていたので少し喉も乾き、コーヒーとクッキーが美味しかった。

　ゲストハウスの庭のバラが満開で、ワカティプ湖を背景にきれい。先ほどの厩舎の方に進むと、左側に鹿と羊の小さな柵があり、先発していた観光客が餌を与えていた。鹿は近くで見ると結構大きく、私の肩の位まである、

ゲストハウス内にはクリスマスツリー

ゲストハウス前の庭もバラがきれい

鹿（ベニソン）　角の間を掻いてやると気持ち良さそうに目を閉じてじっとしている

最近増えているアルパカ
でも愛想が無かった

羊の雄　角が見える

その頭の上に角があるのだから結構すごい。人の手から餌を食べており、角にも触れられる。細かい毛がびっちり生えておりまさに体の一部であることを感じさせる。角の生え際の頭部を手で掻いてやると、気持ちよさそうに目を閉じてじっとしている。羊の方にはオスも居て、小さな角が耳の上に丸まっている。

アルパカも同じ柵の中にいたが、愛想がなく近寄らない。そのほか牛と子羊。子羊は柵から出されて、みんなが代わる代わる抱いて記念撮影。そのあとはシープドックをかわいがり、餌やりガイドのおじさんが「あなたは犬を飼っているのか？」「いいえ飼っていません」「犬

の扱いが上手だ。」などと、何となく英会話していた。売店では糸車を使って羊の毛を紡いでいる娘さんが観光客にいろいろ質問されていた。まだ２年目らしい。

そうこうしているうちに、帰りの船が桟橋に到着。午後の観光客が降り、そのあとに我々が乗船。乗馬のガイドのおじさんも来ているが、午後は町に買い物に行くと話していたので、この船に乗るのだろう。帰りの船では、メインデッキ・サロンで観光ツアーの一行がピアノに合わせて合唱、出航後しばらくしてからクイーンズタウンに到着するまで、クリスマスソングなどをずーと合唱し盛り上がっていた。とりあえずホテルの部屋に帰ってお茶してから町に出る。

売店では羊毛を紡いでいた

路地を通ってみた

土曜日の午後
テラス席はにぎやかになってきている

クイーンズタウン NOVOTEL　HOTEL 正面

（9 日目）

今度はどんな列車なのかな？　今日も英語だ

12/12（日）　晴れ

チェックアウトをして荷物をフロントに預け、出発までまたワカティプ湖畔の散歩に出かけた。途中路地なども歩いてみると、細い路地にも小さなレストランやブティック、地元の人が朝食を摂る様なお店も見つかり、表通りにはない雰囲気がある。

出発時間から 25 分過ぎて昨日乗ったのと同じ黄色い Connect バスが荷物用トレーラを引いて入ってきた。えーこれで 6 時間乗っていくの～？　行き先をチケットで、ダニーデンの方だと確認したあと荷物をトレーラに乗せ出発。

このバスも途中クイーンズタウン空港でさらに乗客を乗せて結構座席もふさがった。運転手が、このバスはクロムウェルで３方向に分かれる、このバスはワナカに行く。クイーンズタウン行きとダニーデン方面に行く人は乗り換えてくださいとの事。外国人同士で大きな声でおしゃべりしている、若いお兄ちゃんはアメリカのシカゴから来たと話していた。ほどなくクロムウェル。昨日と同様 Connect バスの横に停車。我々も乗り換えるつもりで降りていくと、運転手があなたたちは乗っていればいいと言うので、我々はプケランギに行くのだ、ダニーデンの方向でしょうと言ってチケットを見せると、そうだったごめんあちらのバスに

乗り換えだ。とダニーデン方面行きのバスの運転手に声をかけ、荷物の積み替えて出発。事前に地図で見ていたので、アレクサンダーを通過していくことは分かっていたが途中の町の

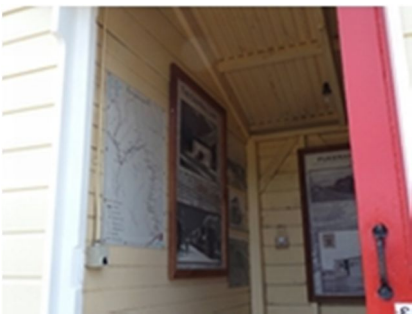
道路が続くこういう場所を、時速 100km 近くで走り続ける。左手前は郵便受けだが母屋は見えない

プケランギ駅はこの小屋だけで周りには何もなし

名前は知らないので今どこを走っているのかよく解らない。牧草地帯を延々と時速 100km 近くで走り、途中バスがガソリンを給油してさらに走り続ける。どこまで走っても牧草地帯が続き今どの辺か全くわからず横に線路が見えてきて、駅らしきところに停車。やっと着いたのかと思ったが、運転手が「あなたたちは次の停留所までです。」と。乗客は我々二人だけとなる。

こちらの方向がダニーデン　何も見えない
売店が出ているのだから、使われているはず

ふたたび発車して、線路を左に見ながら少し行くと、バスは左折して砂利道に入った。すごい土煙を上げて線路沿いに進む途中バスはいきなり線路の上に、ほどなく（鉄橋）があり、そこを過ぎるとまた砂利道に。なるほど線路と道路で橋を共用しているらしい。バスがスピードを落とし、ロータリーの様な所に来た、左側に小さな小屋があり線路が見える。はるか離れたところに家がぽつんと見えるだけで他には何もなし。ロータリーの木の下に露店が２つ。え～、駅の売店？？　おじさんとおばさんが横のベンチに座っており、近くに乗用車が２台止まっているだけ。バスは停車し、運転手が「あなた達はここからダニーデン駅まで列車に乗ります。今チケットを書きますから電車の係員に渡してください。荷物はダニーデン駅に私が責任もって運びます。ダニーデン駅でバスは違うかもしれませんが待っています、そしてホテルまでお送りします」と、トランツアルパイン列車と同様、車の方が早く着くらしい。ホームもなく線路だけがあるプケランギ駅で駅舎（小屋）を見ると、ドアに「使ったら必ず占めてください。」と書いてあった。ドアを開けると六畳ほどの待合室。電気をつけるとタイエリ鉄道の歴史と写真、地図がはってある。いまはプケランギが終点らしいが、かつては他のお客さんが降りた駅まで運転していたそうである。バスの運転手ものんびりと列車が着くのを待っている様子。



プケランギ駅の待合室
使ったら占めてくださいと書いてある

「どっちから来るのですか？」
「こっちからです。」と指さす。
でも見えない。しばらくするとワゴン車が到着し Connect バスの横に止まる。さらに観光バスが一台到着して降りてきたのは中国人の団体、急に騒がしくなる。露店のおじさんおばさんも商売開始。やっと列車が見えてきた。ディーゼル機関車が列車を引いてきた。結構人が乗っている。停車すると乗務員が降りてきてチケットの確認。

ディーゼル機関車が列車の向こうの線路を通って前方に移動してきて、列車に連結した。チケットを見せると、あなたたちはこちらです。と前の方の車両に。ステップの扉を開けて中に案内してくれる。「前の車両にトイレがあります。後ろに食堂車が付いています。あなたたちはどちらの国から来ましたか？」と聞かれて、何でそんなことくのだろうと思いながら「日本です。」と言うと、「後で書いた物を持ってきます、私の説明よりよく解ると思います。出発し

タイエリ渓谷鉄道の機関車　７両の客車を曳く

タイエリ渓谷の景観　両側はエニシダの黄色い花で埋め尽くされていた

てしばらくは左側が良く見えます。しばらくすると右側が良いです。この車両はあなた方だけですから、自由に席を移動して楽しんでください。」といって戻っていった。しばらくすると日本語パンフレットを持ってきてくれた。なんと車両貸切になってしまった。味のある車両だ、木造で椅子は背もたれが回転して方向が変わる。出入り口のドアも木造、天井のアーチは白く塗装された金属の様だ。丸い電燈カバーが歴史を語っているようだ。ふと外を見ると露店のおじさんとおばさんが店じまい。止まっていた乗用車に荷物を積んでいる。この列車の為だけに食料／スイーツとお土産を販売するため毎日通ってきているらしい。

列車が出発すると、乗務員が話してくれた様に左側に渓谷が見えてきた。エニシダが満開

このデッキから乗車

停車駅はこのヒンドンだけ、プケランギよりさらに小さい駅舎
もちろん周りには何もない

で谷を黄色く染めている。列車はゆっくり進み、トンネルや鉄橋をわたり黄色く染まった谷合と青い水の流れが美しい。座る暇もなく窓をあけて写真撮影。景色の良い所では列車の速度を落とし景観が楽しめるように、さすが観光列車だ。先ほどもらった日本語パンフレットを見ながらもうじきトンネルだ窓を閉めなければ。最初の停車駅 HINDEN。５分ほど停車するのでみんな降りて写真撮影。自動ドアではないので、動き出してからでものれるので安心して下車していられる。

出発してしばらくすると今度は列車の右側に渓谷が見え始める。うーん、ゆっくり座っている暇がない。いったい何枚写真を撮った事だろう。渓谷に別れを告げてしばらくすると牧草地帯に、いよいよダニーデンに入った。建物が多くなってきた。牛の放牧されている中を二羽の野生のウサギが走っている。広い牧草地なのでしばらく見ることができた。

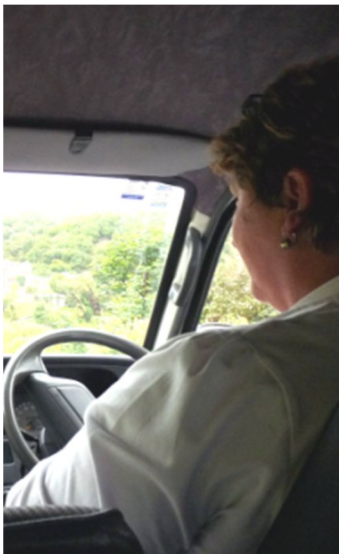
終着駅ダニーデンに到着。三々五々列車をおりて駅舎の方に。ただ改札が有る訳でもなく駅員が居るわけでもなく、日本の電車のイメージで行くと拍子抜けしてしまう。乗客は駅から空いている所を自由に外に出て行くのである。

（10 日目）

ペンギン観察でもガイドは英語　12/13　曇り

ワイルドツアー　8:30 頃からホテルロビーで待つ。今日のガイド兼ドライバーは、恰幅の良いおばちゃんである。

今日もどうやらプライベートガイドの様だ。オタゴ半島の地図で、本日のコースの説明をしてくれた。NZ で最初に作られたラーナック城を見学してから途中で沢山の野鳥を見ながら、オタゴ半島の先にあるロイヤルアルバドロス（アホウドリで翼を広げると２m位になる）を観察。そのあとペンギンプレイスで野生ペンギンを観察。その後船に乗ってダニーデンまで戻るというコース。ペンギンが見られればと申し込んだが、船に乗るとは思ってもいなかった。ガイドさんも我々だけだから、写真が撮りたかったらいつでも言ってくれれば車を止めますと言ってくれた。朝はだいぶ雲が厚かったがオタゴ半島の方に進むにしたがって雲が薄くなり薄日も差してきた。海岸からスタートした道は次第に登りとなり、オタゴ湾が眼下に見え左奥にダニーデンの街が見えてきた。それにしても結構急な斜面だが牧草が茂り、羊や牛が散らばっている。



今日のガイドさん
親切な面倒見の良いおばちゃん

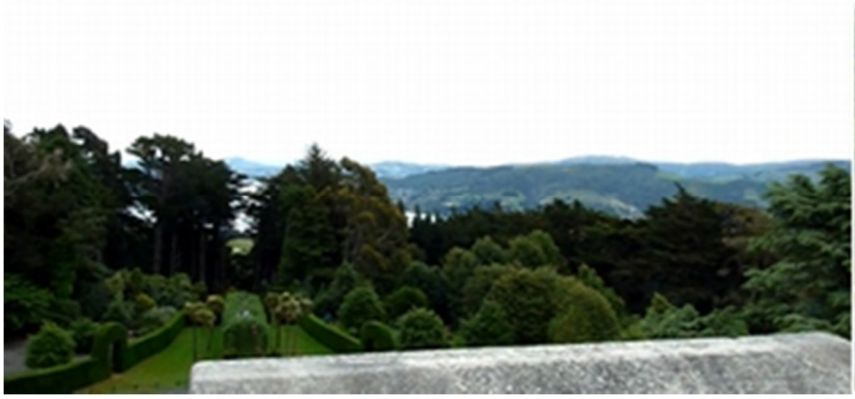
ラーナック城に到着。周囲に庭園があり、右側の建物はレストランになっていると言って、レストランに入り日本語のパンフレットを持ってきてくれた。私が説明するよりよく解るでしょうと。一旦お城の中をざっと案内しますからそのあとは 11:00 まで自由に見学してください。といってお城の正面入り口に。なんとベルを鳴らしてドアを開けてもらうのだ。
このお城、所有者は変わっているが今でも生活しているそうで、一部を観光客に開放しているとの事。それならばベルを鳴らして案内を乞わない訳にはいかない。入り口の左の応接間、中央のらせん状の階段を二階に進み家族の写真のある部屋で、ラーナック城の簡単な歴史と建造からの城主の遷移について説明してくれた。さらに階段を登り、何やらカーテンで仕切

オタゴ半島　これから進む方向

られた部屋に、うす暗い部屋は何代目かの奥様の部屋で、中央に等身大の人形が当時の衣装を着て展示され、周辺にはその人の使用していた衣類や小物、刺繍用品、傘などが展示されている。妻は刺繍に見入っていた。さらに上に行く階段で、ガイドさんはここを登るとラーナック城正面の屋上に出られます。室内、庭などを自由にご覧ください。11:00 時に正面玄関に戻ってくださいと言って別れた。扉を開けて狭いらせん階段を上ると小さな扉があり、開けるとラーナック城正面のバルコニー（屋上）に出た。

ラーナック城
今も持ち主が住んでいて一部を観光用に公開している

大きな石の間からオタゴ湾が見え、足元を見降ろすとお城の庭園が広がっている。どのような時にここを利用していたのだろう、などと思いながら写真撮影（室内は撮影禁止となっている）。上のフロアの各部屋は、子供部屋があり横にバスルーム、当時のままの石作りのバスタブなどがあったが各部屋はこじんまりしていて、どちらかと言えば質素な感じを受けた。外の庭園はきれいに刈り込んだ芝生と生垣、様々な花の咲く花壇に池やせせらぎ、手がかかっている。池にはカモや白鳥がいる、これも飼育されているのか？　お城の周りをぐるっと



正面バルコニーから庭園越しに見るオタゴ湾

庭園にはいろいろな花が植えられている

一周し花や自然の小鳥を見ているうちに、もう 11:00 になる。我々が一足早かったのか、観光バスでツアーの人が大勢お城に入っていく。静かに見学できてよかった。
少し走るとガイドさんが上空を指さして「タカがいる」。さらに少し進むと、左の下の方に「ｘｘｘ」がいる、子供をつれているはずと車の速度を落とす。顔からくちばしが赤く全体が黒い鳥（Pukeko 後日調査）が牧草地の中に歩いている、その少しあとを 2 回りほど小さい子供が３羽後を追っていた。言われなければ気づかずに過ぎている所だ。ここでも車をゆっ

New Zealand Falcon

Pukeko の親子

Royal Spoonbill

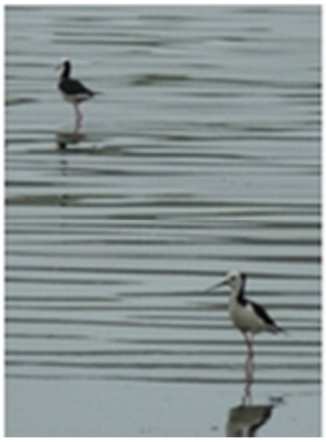
Yellowhead

Paradise Shelduck

砂玉とカニ

　くり静かに進めながら、「スプーンベイ」と指さす。スプーン湾かと思いながら水鳥を撮影。あとで判ったことだがここでも英語がよく解らず大きな勘違いをしていた。左にいるのがパラダイスダック。林の中から飛んできたのが Yellowhead、砂地に小さな石ころみたいなのがあるのでカニがいる。そしてまた右側に別の鳥と次々とガイドさんが教えてくれる。
　海岸を離れ内陸側に少し登ると牧草地の外れに花の咲いている木が見え、NZ の「ｘｘｘ」という木です、とガイドさん大活躍。大変申し訳ないが、鳥の名前や木の名前など、それぞれ教えてくれたのだが残念ながら聞き取れないのと覚えきれない。あとで写真を見ながら調べてみることにする。最初の方で「スプーンベイ」と聞き取ったので（スプーン湾）なのかと思っていたので、帰ってきてから地図を調べてみたがそんな地名は見つからない。詳細な

White Faced Heron



Pied Stilt

地図でないから見つからないのだと思っていたが、鳥の種類で偶然見つけた名前が Royal Spoonbill　これを聞き間違えたらしい。私の英語力はこの程度でよく無事に帰れたものだ。

その後アルバトロスセンターへ、途中でマオリの集会所と教会を見せてくれた。マオリは通常他の NZ 人と同様特定の場所ではなく散らばって生活しているが、結婚式とか部族としての集会が必要な場合に、この集会所や教会を使用しているという事だ。

　アルバドロスセンターに着くとガイドさんがアルバドロス観測ツアーの予約をして「2:00 にまたここに来てください。」と言って別れる。ほどなく観測ツアー、我々の他はスエーデンからのカップルだけ。

Red Billed Gull のコロニー

Royal Albatross

　ロイヤルアルバドロスと営巣地についての説明ビデオを見た後、案内係りが鍵を開けていよいよアルバドロスの営巣地域に入場する、半島の突端で急な上り坂を両側フェンスで仕切られた細い道を登る。右手にはカモメの営巣地が見え、頭上をカモメが飛び交う。観測小屋に入ると前方がガラス張りで双眼鏡がたくさん置いてある。外を見てみるが、どこにいるのかよく解らない。案内係が指さす方になにやら白い物があるがほとんど動いていない。双眼鏡で見ると確かに水鳥の上半身が見える。営巣場所は観測小屋から４か所見えるが、しゃがんでいる（抱卵か？）ので全身は見えない。もっと身近に観測できると思っていたが、ちょっと違った様だ。

　観測終了後、お土産にパウア貝の小片を小袋に詰めて$7.50 を購入して、集合場所に。今

度はペンギンプレイスに行きましょうと少し走る。ペンギンプレイスではすぐにペンギン観察に出発するから待っていてください。あとは朝お渡ししたチケットで船でダニーデンまで戻ってください。といって帰ってしまった。流れが良く把握できず、朝からのガイドさんはここまでと思っていなかったので、きちんとした挨拶もせず大変失礼しました。ほんとにいろいろ案内して頂き、私の訳のわからない英語を一生懸命聞いて理解しようとしてくれたり、鳥の観察や植物の説明など、ガイドしてもらってすごくいろいろ観察や写真撮影することができました。ありがとうございました。

　さてペンギンの方は最初に注意事項を説明した後すぐにマイクロバスに乗り観察コースに出発。バスを降りて歩いて進む。坂を下りながら、「観測小屋の中ではできるだけ音を出さないようにしてください、ペンギンが驚きますから。」と念押しの注意、そして半地下の通路に、上にはネットが掛けてあり人の動きをカモフラージュしている。途中の分岐で左折しそうっと観測小屋の中に。10ｃm程の隙間のあるその外側になんとペンギンの子供が立っている。音を出さない様に近づくとちょうどペンギンの子供の首から上が見えている。目の前である。

ペンギンプレイスでは人間が隠れえて半地下の通路を移動する

観測小屋は 10cm の隙間からペンギン観察
Yellow　Eyed Penguin の親子

観測小屋の少し奥に行って、手前のペンギンの子供を覗くと、親ペンギンが子供の横に寝そべって半分寝ている様だ。観測窓からそっとカメラを差し出して写真撮影。ペンギン親子は全く気にしていない様子。いつまで見ていても飽きない。ガイドさんがそっと次に行くと合図。元の通路に戻りさらに先に進む。今度は観測小屋の突き当りの観測窓の板を外すとその、

Yellow Eyed Penguin の親子（子が２羽）

Yellow Eyed Penguin の親子

先２～３m先に、２羽の子供と親ペンギン日陰で動いている。ここでもガイドさんに次に行くという合図を出されるまで飽きずに眺めていた。その後２か所の観測小屋からほんとに間

近でペンギン親子を観測。これでペンギン観測終了、ガイドさんが「アザラシも見ますか？」と言うので「はい」。

ニュージーランド　ファーシール
砂浜の真ん中に１頭

New Zealand Fur Seal

ペンギン観測通路を出て、丘の上にしばらく進むと海が見えてきた。磯と長い砂浜が見える、その砂浜の真ん中変に黒いアザラシが一匹寝そべっている。さらに磯の方に進んでいくと、岩の横と岩の上に大きなアザラシが見える。ガイドさんが、「向こうに行くともっと近くで見えますよ」途中でカモメの営巣地もあり、ちょうど抱卵の時期らしくカモメが立ち上がったお腹の下に、卵が１個見えていた。テレビなどで抱卵している鳥は、よほどの危険が迫らない限り逃げ出さない様子を見たことがあったが、このカモメ達もほんの１～２ｍの距離でも抱卵を続け大きな鳴き声で威嚇している様子が観察できた。その先の磯と小さな砂浜では磯にアザラシが何頭か見え、脇の砂浜近くで水中にアザラシが泳いでいるのが見え

Red Billed Gull の抱卵

New Zealand Fur Seal　３塔が泳いでいる　左が雄

た。ビデオモードで撮影していると、そのアザラシが磯の方に移動し海草の間から顔を出しながら、ほかにも２頭のアザラシと泳いでいた。ガイドさんが双眼鏡で観察しながら、あのアザラシはケンカして首の所を大きく怪我しているので陸に上がっていないのだと説明してくれた。ここでもかなりゆっくり観察した後駐車場まで戻る。今日は天気になりかなり温度も上がっているので、ペンギンの気持ちがわかる。暑い。

ワイルドクルーズの桟橋

この船で観察後　ダニーデンに帰る

事務所まで戻り、ダニーデン行きの船着き場まで送ってくれた。しばらくすると、沖合に小さな船が見え、どうやらそれがダニーデンに戻る船の様だ。船が着くと、船着き場近くに止まっていた車から人が降りてきて乗船、またしても中国人のグループ。出航すると少し進

んで、アルバトロスの営巣地である半島の先端近くに、空中にはカモメとアルバトロスとその他海鳥が飛んでいる。さすがにロイヤルアルバトロスは大きく翼の長さがカモメの倍以上あり、海風をとらえてスイ―と舞っている。

先ほどのアルバトロス観測小屋が海から見え、その下の方にアルバトロスが座り込んでいるのがよく見える。距離的には観測小屋から見るより遠いが、海側からの方が所在がよくわかる。つがいの２羽がくちばしを触れ合っている様子も観察できた。また下の方の磯にはアザラシの子供や鵜なども見え、船は磯のすぐ近くまで行って漂いながら間近に観測できる。

Royal Albatross の観察所　飛んでいる

Royal Albatross つがいが

Royal Albatross 飛ぶとこの大きさ

Spotted Shag

New Zealand Fur Seal の子供

New Zealand Fur Seal の親子

少し沖合に進んでも、ロイヤルアルバドロスが船の近くを滑空し、海の中には赤くエビ（プランクトン・アミ？）の塊も漂い海鳥がそれを食べるために低空で飛ぶのを見ていると、なんとペンギンが海面に顔を出していた。

と、船がさっき出た桟橋に戻った？？

えー、この船ダニーデンに行くのじゃないの？

アミ（赤く見える）を食べるカモメ

海を泳ぐ Yellow Eyed Penguin の若鳥

桟橋に着くと大半の人が下船、インド人らしいカップルが船員にダニーデンに行かないのかと心配そうに聞いている。これからダニーデンに向かうので、そのまま乗っていてと言われていたので、我々だけでないことを知った。結局我々と先ほどのカップルだけが船に残った。船が再び出航すると、クルーがコーヒーはいかがですか？と温かいコーヒーを持ってきてくれた。どうやらサービスらしい。今度こそダニーデンに向かって進んでいる。

ラーナック城からオタゴ湾が見えたのだから、船からラーナック城が見えるのではないかと思い船首甲板で左手のオタゴ半島を見ると、見えた。ラーナック城の四角い建物が緩やかなカーブを描いている半島の稜線の間に見える。最大のズームでラーナック城を確認してパチリ。風が冷たいがこれでも夏。ダニーデンに近づくにしたがって雲が厚くなってきている。